

件名／令和7年度「油濁情報」No.28の記事【海渚レター No.81】

みなさん、ゆだくです。前々回の「油濁情報」No.28の続きをお送りしたい。
当機構の機関誌の1つ「油濁情報」No.28のうち、「ナホトカ号重油流出事故～こぼれ話～」
の記事をみなさんに読んでいただきたいのだ。

メール文にも書いてあったように、佐々木邦昭氏は、ナホトカ号重油流出事故の現場での対応をした貴重な経験を語ることができる油濁対策のエキスパートなのである！
そんな貴重な人材の1人が、先月お亡くなりになってしまったのだ・・・。
とても残念だが、佐々木氏の生前の貴重な経験・知識を惜しみなくみんなに広めていくことが、ゆだく先生として出来ることの1つではないかと思っているところである。

ぜひぜひ、画面を拡大して、全文を読んでくれたら嬉しいのだ！





「ナホトカ号重油流出事故」 ～こぼれ話～

佐々木邦昭
元海上災害防止センター防災部長

平成9年のナホトカ号の対応で、印象に残る幾つかの出来事について振り返ってみました。

1. 思わず出た「松平春嶽」

「松平春嶽なら、どう思うでしょうか。」
これは無意識に出た言葉だった。それまで喧々諤々だった会が一瞬沈黙し、騒ぎが収まった。1月末頃、石川県加賀市塩屋海岸に集積されたドラム缶2千本ほどが、深夜に許可なく隣県の福井港へ搬入されたとして大騒ぎになった時のことである。
その翌日、私は福井県庁に呼び出されたのだが、その時に福井港は石川県の加賀市と地理的に近い事から搬入を了承するよう強く説得した。本事故については、平時の対応ではなく緊急を要する困難としての対応をするべきであると思い、この時ふと思い付いたのが「春嶽公」だった。最終的に福井港への搬入について福井県庁の了解を得られたが、その日の夜遅く福井県N課長補佐が美酒「黒龍」を携え訪ねて来られ、暫く春嶽談義となった。今なお、春嶽公は県民の誇りであ

ることをその時に知った。以降、福井県側との交渉等、関係性は著しく良好となった。

一方、石川県庁からは、本件についてお礼の一言もなかった。逆に石川県消防防災課は、最初から私の事を「手配師」と呼び捨てていた（同年8月の『週刊誌プレイボーイ』でも手配師として登場）。以後も消防防災課は、私を見下す言葉を平気で使った上に、「金沢港に集積した数千本のドラム缶を早急に他県に搬出せよ」とこんな調子のため、同課とは絶縁したい思いが残った。ただ、同県水産課とは良好な関係が続いていた。その後、この消防防災課は果たして変わったのだろうか？

※松平春嶽は幕末に勝海舟の影響を受けて坂本龍馬を愛した殿様であり、福井藩主として藩政改革や明治維新に向けての改革に取り組んだ福井県の偉人である。

2. 「揉めれば揉める程嬉しい」立場の人達

現場の関係者とは、以前から意見の違いにより揉める事がしばしばあった。多くの場合、深入りすることを避けたものの、自分の考えを押し通す場面が多くなっていったことが揉める原因の1つでもあった。最も多かった衝突の原因は、初期における油処理剤の使用の有無についてであった。従前から高粘度のエマルジョンに大量の油処理剤を散布する事が恒例になっていたという状況があった。そのような中、以下のような理由から私は油処理剤の使用に反対していた。

①マリタイム・ガーデニア号（平成2年1月京都府伊根町）、泰光丸（平成5年5月福島県小名浜）等の油流出事故現場を経験して分かった事は、油処理剤は高粘度エマルジョンに対しては全く効果が無いということであった。それにも関わらず、油処理剤が大量に散布されるなど、業者間の売り上げ競争の場になることが多かった。

②豊孝丸（平成6年10月和歌山県下津）の原油流出事故においては、油処理剤の使用について公開実験を実施し、効果の無いことを確認して使用を避けた。油処理剤の使用を避けられたもう一つの理由としては、漁業者により既に膨大な油吸着材が散布されていたということがあった（油吸着材と油処理剤は同一海域で使えない）。事故当日、早朝6時30分に乗車中の新幹線から手配したガット船は、4時間後の午前10時頃に到着し、沖合オイルフェンスに溜まった油等を瞬く間に回収したので、昼からは沿岸部の油回収作業に取り掛かることにしていた。しかし、当時の和歌山県知事が自衛隊の出動を既に要請していたため、全ての油を回収してしまわずに沿岸部の油をオイルフェンスで取り囲んで監視・確保しておいた。そして、翌々日に自衛隊が到着した際には、これらの油を自衛隊と協力しつつ、ガット船でほぼ回収した。主な油の回収に要した期間は5日間と短期であったこともあり、県水産課の調査では漁業被害はなしであった。この時、現場にて、関係者からこれだけの規模の事故であるから2か月程は仕事があると思って来たのに、短期回収とはどういうことだ？との苦情があった。なお、もしこの時、既に運び込まれていた大量の油処理剤を使っていたとしたら、被害規模は甚大になっていたはずである。

③ナホトカ号の重油流出事故（平成9年1月）においても、油処理剤を使わないということを三国の現場で最初に宣言したが、身内の海上災害防止センター本部は最新型の高粘度用油処理剤の使用を予定していた。また、既に海保も1月末までに160klもの油処理剤を散布していた。

④その翌年、転覆したタンカー豊晴丸（平成10年11月山口県徳山港）の事故においては、油処理剤を使用せず、オイルフェンス内の油は強力吸引車により殆ど回収したが、一部の残油は湾内に拡がった。

この油膜に対し、作業に当たったサルベージ会社は油処理剤の効果はないと明言していたにも関わらず、サーベイヤーの判断で油処理剤が散布された。結果的に、P I 保険への請求において、油処理剤が高額であったため、P I 保険側と請求する側双方の弁護士同士で争うことになった。私は海上災害防止センター顧問弁護士から呼び出しを受けて、エマルジョン化により流出油が含水して増えた事により油処理剤の効果がなかったという言い訳の供述調書を取られた。この顧問弁護士は、豊孝丸の事故対応以来、私を現場のトラブル源と思ったのか、「我々は事故対応において揉めれば揉める程嬉しいのだ」とも語っていた。我々とは一体、誰と誰なのか、今なお疑問が残っている。

3. 税金泥棒の捨て台詞を残して去った

1月20日、危険箇所へ溜まった油をコンクリートポンプ車によって回収するために徹夜の作業を計画し、海保対策本部にその協力を要請するために訪ねた。しかし後輩の保安官は「我々は原因者の動向を監視・指導する立場」であるとして、その協力はできないとの事であった。海保は沖合の油には関心があるが、陸域の油について対象外であるとも語った。海保は巡視船から柄杓によって回収すること、油処理剤散布が重要であると真面目に考えているようで、そのことに対し、私は無性に腹が立ち、情けなく思う中で、思わず「税金泥棒」という言葉を吐いて、その場を退出したのであった。この言葉は海保の現地本部長の日誌に残されていた。

その当日の夜、嵐の中で仮設道路の付け根に溜まっていた油をコンクリートポンプ車により回収する映像が放映されたのであるが、日誌には「佐々木君が来た、税金泥棒の捨て台詞を残して去った。（夜TVの放送を見て）この事を佐々木君は言っていたのか」との言葉を残していたとの噂を、その後しばらく経ってから耳にした記憶がある。

4. 石川県能登半島西部猿山岬沖を漂う巨大油塊回収作戦

1月12日未明から石川県能登半島西部猿山岬沖を漂う巨大油塊の回収作戦が実行に移された。能登半島猿山岬沖に見つかった巨大な油塊群の漂着を防ぎ、回収してしまう事が目的である。前日、石川県谷本知事と水産課を交えて協議し、県の水産調査船「白山」とガット船「寿号」（海保機動防除隊副隊長、センター訓練所教官2名等同乗）、作業船（センター教官1名同乗）が金沢沖で会合することとなった。しかし、目的の油塊群が見つからず、小規模な油塊群のみの回収となった。

この作戦については、第三管区海上保安本部の機動防除隊隊長を通じて、海保の担当部局にも伝わっていたと思っていた。しかし、現場には巡視船の姿はなく、海保のその他の支援も全くなかった（海保は油処理剤散布しか頭になかったようだ）。石川県庁県も水産課が位置情報を把握していると思いついて、水産課は把握していなかった。万全の準備を徹夜で行ったにもかかわらず、関係機関に必要な情報が伝わらなかったこと、そして、この回収作戦が軽視されたのは何故だったのか・・・。

後で分かった事ではあるが、目的の油塊群は我々の北5海里のところにあり、そこで輪島の漁船団が油にまみれながら柄杓で油を回収していたということであった。結果として、この油回収作戦は失敗に終わった。もしこの作戦が成功していたら、翌日以降の能登半島海岸への油の漂着は間違いなく防げたはずである。

5. マスコミからの取材

(1) T V局

平成9年2月中旬、NHK（クローズアップ現代）、TBS（関口宏のモーニングショー）への出演の依頼があった。NHKには「油の回収の実態」について話を求められていたが、機械力

による短期大量回収システムについて語ろうか迷ったものの、まだ不確実な事が多いことと多忙であることを理由に断った。その結果、ボランティアに的を絞った内容の放送となった。TBSは最初からボランティアに焦点を絞った取材をしている中で、私にC重油の特徴について解説を求めてきて約1時間の取材が行われたが、結果的に本番で放送された時間は1分足らずのものであった。

(2) 読売新聞

ナホトカ号の現場が終わった平成12年5月、海上災害防止センターに読売新聞（岡崎記者）から取材の申し入れがあった。理事長は私を呼び、「思うところを何でも話して良い」と言った。本当は、理事長も言いたい事を山の様に抱えていたのであろうが、立場上言えないので、私に代弁させるのだと理解した。

2時間ほどの取材であったが、平成12年5月20日（金）の全国版夕刊15頁の半分のスペースにわたって「今だから」のタイトルで私の大きな写真入りの記事が載った。内容としては、「現場での拘子定規な法律」、「霞が関や政治家から、あれこれ"口出し"が飛んでくる」、「ガット船の手配に邪魔が入った」、「回収船から海水を排出する事は法律違反」、「回収した油は関税法の手続きが必要」等というものであった。記事の内容の多くは、従来から霞が関への忖度により公表する事が避けられていたものであった。

自分としては、このように紙面の半分を占める記事になるとは想定していなかった。翌週の月曜日の朝、早速、私は霞が関の海保幹部から呼び出しを受けた。その幹部の部屋で、「君は問題意識を持っているなら、なぜ外部でなく内部で解決をしないのか」と叱責されたのである。その幹部にとっては、新聞内容の多くのことが初耳だったようである。

6. 体調異変

健康と体力には日頃から自信過剰であった私は、ナホトカ号事故初期の1か月間ほどは不眠不休に耐えられていた。しかし、事故発生から2か月を過ぎてから、夜に寝付けなくなって日中の疲労感が募り、睡眠薬を服用するようになった。

東京に戻ってから、高田馬場にある病院から処方された睡眠薬「ハルシオン」を半年ほど服用していた頃、心身に異変が起きていることに気がついた。記憶喪失が起こっていたのである。大事な過去と今の記憶が「密閉した箱」の中に閉じ込められたのか、全く思い出せない。そして遂に、その思い出せない事実さえ記憶から消えた。

当時、私は海上災害防止センター防災部長の要職に就いていたが、この状況では、その任が果たせないと思い、平成15年3月、自死寸前の限界を悟って辞表を提出した。センターからは3か月の休職を勧められ、小樽市朝里にある睡眠クリニックに1か月間入院することになった。治療としては、午前と午後の散歩（5km位）をすること、そして規則正しい生活をするよう指導を受けた。病名は「周期性四肢運動障害」というもので、睡眠中に手足がピクピク動くことで、深い睡眠を全くとれなくなっていた。

入院から1か月後に退院し、自宅療養となって通院していたが、体内時計は狂ったままで治らなかった。医師からは、これは治らないということを実感して生活するよう言われた。3か月の休職により給与も3割カットとなった。その後28年近く経った今でもこの症状は残っており、服用する日々の睡眠剤も膨大な量となった。20数年経ってから、当時の茅根理事長等から強く勧められていた「海に油が流れると・・・」をようやく書き始めることができた時、「密閉した箱」から、忘れていた記憶が次々と出て来るようになった。

油濁事故に対応した関係者が心の病に陥り、程なく病死、自死をした事例は少なくない。幸いにも、私は体力と健康、経験に恵まれていたから生き抜くことが出来たのだと思っている。

国内外でも油濁事故関係者の死亡例は少なくない。油濁に責任を持つ者は、平時から「健康管理」、「体力維持」、「油濁に関する基礎知識」、「国際油濁会議への出席」、「多くの経験を積み重ねる」の5点を心がけることが不可欠である。さもないと、普通の人では耐えかねる現実が、現場において次々と襲って来るので、身が持たないのである。海上災害防止センターは油濁被害を総合的に縮減させる使命を担う組織である。ナホトカ号規模の油濁事故においても、職員各自が与えられた使命を全うすれば、数百億円以上の被害拡大を予防できる国内唯一の組織であることを胸に、全ての職員に、規模の大小に関わらず、多くの油濁事故の現場を経験して欲しいと思う。現場は情報の宝庫であり、決して軽視してはならない。

7. 「ザ！昭和の99大ニュース」取材

令和6年8月末に突然、フジテレビから、ナホトカ号についてのインタビューとTV撮影の申し入れがあった。既に28年近く前のナホトカ号重油流出事故について、何故今更取り上げるのかと逆に尋ねたところ、「佐々木氏の投稿記事を見つけた。当時ボランティア一色の報道であったが、機械力・ビット等の活躍について知った。これは今まで全く報道されていなかったこと」と返答があった。そこで機械力のシステムの活用により被害規模の縮減を図ったと説明し、11月21日には実際に福井県三国の現場等でインタビューを2時間ほど受けた。その一部が12月27日放送の「ザ！昭和の99大ニュース」の中で「ナホトカ号重油流出」として13分間程全国版にて放送された。この放送により初めて、「ガット船や強力吸引車の導入」、「回収油の一時保管用大型ビットの造設」、「産廃処理場と搬出方法の確保」といった3つの一連の行程を、機械力を中心にシステム化したことが、短期間で海の回復に繋がったのであると、福井県三国漁協の組合長の言葉を介して、初めて世に知らずことが出来たように思えた。

8. 「アナザーストーリーズ・運命の分岐点」取材

令和7年3月に取材班が東京から札幌まで取材に訪れ、2日間に亘ってインタビューを受けた。この番組はBSで5月28日に全国に放送された。

※放映番組はNHKオンデマンド「アナザーストーリーズ・運命の分岐点ナホトカ号重油流出 日本海を救った人々の力」より視聴可能

佐々木邦昭（ささき くにあき）

昭和56年に海上保安庁退職後、昭和59年から海上災害防止センターに勤務、平成17年に（独）海上災害防止センターを退職。その間、湾岸戦争のペルシャ湾原油流出事故、ナホトカ号重油流出事故等40件ほどの事故に携わる。

（公財）海と渚環境美化・油濁対策機構では、令和4年度まで漁場油濁事故対策専門家・漁場油濁被害対策専門家・アドバイザーとして事故現場をはじめ講習会など全国で指導を行ってきた。また、著書に「海に油が流れたら・・・」「川に油が流れたら・・・」がある。



かもめちゃん・ゆだく先生への感想・質問など大歓迎だよ。

興味があったら、海洋プラスチックに関する Q&A についてもホームページに載っているから、
こちらもぜひぜひ見てみてね。

<https://www.umitonagisa.or.jp/plastic-trash/>

バックナンバーはこちらから。

<https://www.umitonagisa.or.jp/mm/>

かもめちゃんからのお知らせ

海岸清掃の報告や油防除に関する講習会など Twitter で最新情報をチェック

<https://twitter.com/umitonagisa>

海浜清掃ハンドブック 海浜清掃は安全第一！

<https://www.umitonagisa.or.jp/clean-up/>

漁業系海洋プラスチックごみについて知りたければこちら！

<https://www.umitonagisa.or.jp/plastic-trash/>

★皆様へのお願い

現在、当機構の活動を支援していただけるスポンサーを募集しています。

支援対象は全国の海浜清掃活動及び地域の小規模な草の根活動の支援、
プラゴミ処理機械の普及活動などです。

詳細については、お手数ですが、当機構事務局までお問い合わせください。

新規登録又は配信停止（登録解除）をご希望の方はこちらからお手続きください。

<https://www.umitonagisa.or.jp/mm/>



公益財団法人海と渚環境美化・油濁対策機構

〒113-0034 東京都文京区湯島 2-31-24

TEL 03-5800-0130 FAX 03-5800-0131

<https://www.umitonagisa.or.jp/>
